

## 1. 2. 5 音楽科

田川 聖旨

### 1. 研究主題

「各領域・分野の密接な関連を意識したカリキュラム開発」  
～特に鑑賞での学びを活かした器楽（創作）活動を念頭にして

### 2. 研究主題について

ここ数年、本校音楽科では、限られた授業時間内で、歌唱・器楽・創作・鑑賞といった全ての領域において、最大限の成果を上げるためのカリキュラム研究を行ってきた。限られた少ない授業時間で最大限の効果を上げるためには、単なる一単元の開発ではなく、3年間の教科カリキュラム全体における一つ一つの単元のつながりを強く持ち、毎回の学習に、それまでの学習が強く活かされるカリキュラム開発がなされることが必要で、それにより生徒が自己能力の伸長をより多く実感し、喜びや達成感を強く感じる授業になり得ると常々考えているからである。

今回の音楽科学習指導要領の改訂では、例えば、「創意工夫して表現する」といった言葉が数多く入って来ている。鑑賞から得た何かを生徒達の音楽表現に活かさせることを念頭に、鑑賞・表現それぞれの活動が相互的・スパイラル的に絡み合って強く関連づけられ、深い学びとなることを狙いとし、今年度も昨年度に引き続き、上記のような研究主題を設定した。

なお、昨年度の副題は、「特に鑑賞での学びを活かした表現活動を念頭にして」であったが、今年度は、表現活動の中でも、とりわけ4年ほど前から取り組んでいる器楽（創作）活動を軸としてカリキュラム研究を行おうという趣旨で、上記のようになった。

### 3. 研究の経過と概要

本校音楽科では、平成15～17年度において「国際社会で生きていくための日本人としてのアイデンティティとコミュニケーション能力の育成をめざした音楽科カリキュラム」というテーマで、研究を行ってきた。その間に並行して、「領域・分野を超えた融合型単元」開発のための模索を行い、同年の公開研究会では「歌唱分野と創作分野の融合的活動」といった位置づけで、「コードでゴスペル風セッション」といった研究発表を行った。

翌平成18年度からは、本格的に「各領域・分野の密接な関連を意識したカリキュラム開発」（副題：特に多くの創作的活動を念頭にして）と位置づけ、まずは単なる模倣的表現活動に留まらない、発展的・創作的表現活動についての単元研究をいくつか行ってきた。そんな中、新しい音楽科学習指導要領が発表となり、新たに初めて「共通事項」なるものが示され、従来からの「表現活動を通して育てる力」と「鑑賞活動を通して育てる力」の関連を強化し、表現と鑑賞が密接に絡み合った学びの中で、（各教科の新学習指導要領でクローズアップされている「言語力の育成」なども含んだ、）幅広い意味での学力育成を目指すための新しい提案がなされた。

つまり、今回の指導要領改訂により、今後のカリキュラム作成において、「鑑賞」と「表現」それぞれの学習活動が充分関連づけられ、かつ充分吟味される必要性がより一層高くなったと言えよう。

そのような訳で、昨年度（平成20年度）からは、まだ私自身が本校着任以来あまり手がつけられていなかった「鑑賞での学びを表現に活かす」カリキュラム開発へ一旦シフトすることを念頭に、今年度は研究を行うこととした次第である。

#### 4. 音楽科 平成 21 年度カリキュラム表

学年	学期	月	教科の目標	教育内容と教育方法 (学習単元～題材・話題・課題と学習活動)
1	1	4	教科目標 1 年目標 ・人間的に文化的な富みと一つとして、音楽を積極的に生活に取り入れ、楽しむ姿勢を育てる。 ・自己を人前で堂々と表現できる音楽性を身につける。 ・音楽による仲間との絆を深め、あいを通して、音楽を楽しむ喜びや、仲間とコミュニケーションする喜びを味わわせる。	●どのような力を育むのか(学力保障) ・人前で堂々と表現できる歌唱能力とそこから得られる表現の喜びを元に表現に対する自信を育む。 ・楽譜の機能を知り、活用する意欲を育む。 ・楽器表現の基本を学び、豊かな音楽表現を味わい、楽しみ、表現できる基礎的な技能と感性を育む。 【数科学習(基本学習)】 ・教科オリエンテーション ～なぜ学校で音楽を学習するか ・「校歌を堂々と歌おう」 ～歌唱姿勢や発声の基本について ・「楽器(リコーダー)に親しもう」 ～表現の基本と工夫(教材曲:聖者の行進 他) ・「器楽音楽(パロックオーケストラ)鑑賞」 曲に込められた表現の工夫を感じるよう (ヴィヴァルディ曲:四季より春 他) 【生活学習】 ・クラス合唱曲選曲の準備(委員の決定)
	2	9	2 年目標 ・あきらめず、音楽に積極的に取り組む。日本人としてのアイデンティティを育むとともに、他者の個性や音楽性を認める事を通して、自らも豊かな感性を養う。	・声の表現、合唱の響きへ興味を持たせ、自ら表現する喜びを感じる。 ・合唱を作る中で、パートとしての役割を知り、響きや表現をつくる音楽的、協力的な練習態度を育む。 ・リコーダーの基礎基本を定着させ、他の人と合奏することを通して、器楽アンサンブルの楽しさを感じとらせる。 ・「混声合唱」 ～合唱の響きを味わいながら、クラスで合唱を作り上げる楽しさを知ろう ・リコーダーの基本を身につけよう
	3	1	3 年目標 ・音楽に由来する仲間との絆を深め、あいを通して、音楽を楽しむ喜びや、仲間とコミュニケーションする喜びを味わわせる。	・日本の伝統楽器(等)の音に親しみ、自国の音楽と多様な表現への興味を持たせる。 ・和楽器(等)に親しみ、「日本の音」について考えるとともに、仲間と協調しつつ自由な発想で新しい音楽をつくろうとする態度を育てる。 ・「等に親しみ、リコーダーに自信を持とう」 ～両方の楽器をあやつれるようになるよう ・「グループで自分達らしい音楽を創ろう」 (教材曲:日本古謡「さくらさくら」他) ～自分の好きな楽器で、自分達の世界を表現しよう。
2	1	4	2, 3 年目標 あらゆる表現形態への関心を高め、その技法を知り、自分なりの工夫を交えた表現ができるようになる。	・外国の音楽ジャンルに好奇心を持ち、それぞれの表現上の特徴を感じ取りつつ、表現する喜びを感じ取り、内面を表現する力を育てる。 ・外国の器楽音楽に込められた音楽の表情を味わわせ、さらに表現上の細かい工夫を知ることで、より豊かな音楽表現の世界に気づかせる。 ・既存曲のリズムや音をアレンジして、自由に色々なメロディーを作る楽しさを味わわせる。 ・「諸外国の器楽作品に親れてみよう」 ～主に英語・イタリア語歌唱作品の歌唱(含二重唱)及び鑑賞 ・「カンゾーネを知ろう」 (教材曲:サンタラチア 他) ・「リコーダーでアレンジして演奏しよう」 (教材曲:ラヴァース・コンチェルト 他)
	2	9	・あきらめず、音楽に積極的に取り組む。日本人としてのアイデンティティを育むとともに、他者の個性や音楽性を認める事を通して、自らも豊かな感性を養う。	・クラス全員が協力して合唱を作り上げる過程において、練習を工夫することによりさらに表現の高まりを実感する喜びを味わわせる。 ・様々な音楽を味わうことを通して、諸外国の音楽文化への関心と理解を広げさせる。また、日本の伝統音楽の魅力を知らせる。 ・「混声合唱」 ～クラスが一丸となり協力し、更に高いレベルの感動をめざそう ・「西洋と日本の伝統音楽」 ～オーケストラから雅楽・歌舞伎まで
	3	1	・音楽に由来する仲間との絆を深め、あいを通して、音楽を楽しむ喜びや、仲間とコミュニケーションする喜びを味わわせる。	・「西洋と日本の伝統音楽」 (前学期の続き) ～オーケストラから雅楽・歌舞伎まで
3	1	4	・あきらめず、音楽に積極的に取り組む。日本人としてのアイデンティティを育むとともに、他者の個性や音楽性を認める事を通して、自らも豊かな感性を養う。	・仲間と互いに工夫し、高めあいつつ音楽を完成させるコミュニケーションの過程を通して、集団で工夫して音楽を表現する喜びを感じ取りさせる。 ・身近に存在するいろいろな音楽と向き合い、表現や鑑賞を通して自己表現の力としての音楽に気づかせる。 ・日本歌曲の美しさを感じ取りつつ、仲間と工夫してアンサンブルする喜びを味わわせる。 ・「コードネームを学ぼう」 ・「グループアンサンブル」 ～コードネームの知識を生かして、楽譜にとられない自由な発想・型式の合奏を作ろう (教材曲:歌集「あんなの歌」より 他) ・「日本歌曲をデュエットしよう」 (教材曲:滝廉太郎「花」)
	2	9	・あきらめず、音楽に積極的に取り組む。日本人としてのアイデンティティを育むとともに、他者の個性や音楽性を認める事を通して、自らも豊かな感性を養う。	・合唱曲の選曲から仕上げまでの過程を重視し、今までに得た自分自身の表現力を最大限に発揮するための具体的なイメージづくりや練習計画の工夫を行う。 ・これまでに得た音楽的知識・技能などをフルに使い、管弦楽曲の鑑賞で感じた自分達の世界を、楽器で独自に表現しよう。 ・「クラスのメッセージとしての合唱をしよう」 ～今までに得た知識や技能を最後の合唱に活かそう。 ・「管弦楽曲の鑑賞を活かしたグループ創作活動」
	3	1	・あきらめず、音楽に積極的に取り組む。日本人としてのアイデンティティを育むとともに、他者の個性や音楽性を認める事を通して、自らも豊かな感性を養う。	・「自分の音楽」を紹介しよう ～あらゆる手段を使って自分(達)にとっての音楽をみんなに伝えよう ・「世界に誇る日本の現代音楽作品を知ろう」 ～試演動画を主とした邦人作品の鑑賞

## 5. 研究報告 ～今年度の授業実践より

### A. 3年生1学期における取り組みより

3. で述べた今年度の研究に関連し、昨年度までの取り組みとして、4年前から3年生の1学期に取り組んでいる器楽・創作領域における今年度の授業実践の概略を、下記へご紹介する。

#### (1) 対象学年・時期

61回生3年次 1学期(5～6月)

#### (2) 題材名(～題材概要/時間数)

「世界にたった一つの、『個性あふれるグループ合奏』を創ろう！」

～歌集の旋律とコードネームの知識を用いて、好きな楽器で自由なグループ合奏を行う

／全9時(うちコードネーム講座約3時間、グループ合奏約5時間、合奏発表会1時間)

詳細は、生徒配付プリント「別紙1」(後掲)をご覧ください。

#### (3) 題材の目標及び内容 ～新学習指導要領(平成20年版)との関連において

##### 【目標】

- ・自分の好きな(演奏可能な)楽器による、クラスメイトとのグループでの器楽・創作活動を通して、音楽活動の音や音楽への興味・関心をさらに高め、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる。
- ・多様な音楽表現の豊かさや美しさを感じ取り、創意工夫して表現する能力を高める。

##### 【内容】

##### 「A表現」

(2) 器楽に関する内容(ア)(イ)(ウ) (3) 創作に関する内容(ア)(イ)

(4) 表現教材(ア)

##### 【共通事項】(ア)(イ)

#### (4) 主な使用教材・楽器

ア. 歌集「中学生みんなの歌」(任意の1曲を選び、楽譜を素材として自由に合奏する)

イ. コードネームについての学習プリント・ミュージックノート

ウ. 各自が演奏できる楽器(音楽室にあるもの、または任意持参)

#### (5) 題材設定・授業運営の考え方

(詳しくは、まず次々頁掲載の「生徒配付プリント」をご覧ください。)

中3ともなると、授業外の場合による音楽経験の差などにより、読譜能力や器楽の表現能力の差は、得意な生徒とそうでない生徒との間で著しい。そこで本題材では「楽譜があまり読めない生徒でも、演奏に参加可能な取り組みであること」との前提の元で、授業計画を作成した。

表現活動に自信のない生徒(グループ)ほど、技術的に簡単な(いわゆる平易な)曲を選ぶ傾向があるのは当然だろう。しかし、かえってそのような曲が素材だと、生徒は「元の旋律を単純に模倣・再現するのに徐々に飽きて、いずれはつまらなくなり、創意工夫をこらそうとなってくる」場合もあり、結果として生徒に潜在する自由な創造性を引き出せる場合も少なくない。あくまでも生徒に対しては、単なる模倣・楽譜を再現するテクニックのみに留まることなく、旋律を(既成の市販楽譜等を使わずに、個人個人の発想で)オリジナリティのある形に自らアレンジすることを、でき得る限り推奨し、本単元での評価の対象とすることを明示して取り組ませることとした。(なお、本校での記譜指導は、コードネーム指導に必要最低限程度しか行っておらず、特に生徒へ「アレンジしたものを楽譜で残せ」といった指示も一切していない。ただ、メモを残しておきたい生徒については、五線紙等を渡し、メモの方法などを指南した。)

また、思春期特有の「羞恥心による表現へのためらい」に対し、少しでも自己開放できやすく楽しめる環境を作ることにより、より自由な(創意工夫的)発想を促すため、「好きな

仲間と共に、自分達の選んだ楽器や曲で、2～6人による任意のグループを組み、合奏する」といった形を基本に、取り組ませることとした。

教師側としては、数多くのグループ（1クラス辺り10グループ位）への個別指導をできる限り確保することが重要な課題となるが、限られた授業時間内で個々のグループへ効果的なアドバイスを十分にしにくい状況下において、如何に全体へのアドバイスを効率的かつ効果的に行うかも非常に重要なポイントとなってくる。（そのために、音楽の各諸要素別に、創意工夫した例を、生徒に実演を交えて短時間で提示できるような工夫も行っている。）

追記： このような器楽＋創作分野での取組は、平成19年度の1年生でも、箏とりコーダーによる授業実践として実施し、教育研究2007でご報告させていただいたところである。

61 回生 3 年 1 学期 音楽科課題 3 年 \_\_\_\_ 組 \_\_\_\_ 番 氏名 \_\_\_\_\_

## ♪世界にたった一つの、 「個性あふれるグループ合奏」を創ろう！

### [基本的な条件]

1. 曲は、歌集「中学生のみんなの歌」より選ぶことにする
2. 他の市販楽譜等の使用は不可。自分達でアレンジを工夫して演奏すること
3. 1 グループあたり 2 ～ 6 人とし、演奏時間は 1 分～ 3 分程度とする
4. 学習したコードネームの知識を最大限に活かしつつ、可能な限り工夫する  
(工夫の方法については、班ごとの練習中に、積極的に田川からのアドバイスを受けましょう！)

### わりと簡単に演奏できるオススメ曲 ～歌集「中学生のみんなの歌」より

- \* 「リコーダー」マークの付いている曲 または
- \* 「二部」(＝二部合唱) マーク が付いている曲で、かつ
- \* コードの種類があまり多くない曲 …が比較的簡単に演奏できます！

例：中でも、特に有名な曲で演奏しやすい曲を抜粋 (※はやや難しいかも)

- 34 ふるさと / 50 どじょっこふなっこ / 69 一週間  
72 森へ行きましょう / 73 遠き山に日は落ちて  
74 おお牧場はみどり / 75 ローレライ / 76 よろこびの歌  
78 山の音楽家 / 79 ブラームの子守歌 / 82 きよしの夜  
87 おおブレネリ / 88 もえろよもえろ / ※ 101 大きな古時計  
116 グリーングリーン / 117 今日の日はさようなら / 118 ドレミの歌

### [その他の留意点]

- ☆ 実質 3 回ほど (計約 180 分程度) の練習で、全員が完成出来そうな演奏になるよう工夫する。  
(例えば「難しくなりすぎないよう、繰り返しを多くする」など)

(アレンジの方法については、下欄「ポイント@曲づくり」参照)

- ～ 木琴・鉄琴など、音楽室に数の少ない楽器は、練習時間が確保しにくいので、その点なども考慮すること。
- ～ 音量の特に大きい楽器は、(周囲への迷惑をかけないよう) 必ず個室で練習してもらいます。従って、クラス内に個室利用希望者が多い場合、練習時間が制限されることになるので、その点も考慮しておくこと。

☆グループの中で演奏の役割分担を行うと良い。

→パート割当については、各自の希望楽器仮決定後、事前に班全員で田川からアドバイスを受けること。[必須]

～ 6 人グループのパート割当例～	[各人の希望楽器]
メロディー (主旋律) パート	← リコーダー
メロディー (対旋律パート)	← リコーダー
コードパート	← ギター
コードパート	← 木琴
ベースパート	← キーボード
パーカッション (打楽器) パート	← 各種打楽器

### [ポイント@曲づくり]

☆ 曲の全部または一部を、少しずつ変化させつつ繰り返し演奏すると良い！

途中からアレンジを変える方法例

- ・ 拍子を変える…3 拍子を 4 拍子に変えてみるなど
- ・ 曲調 (曲の雰囲気) を変えてみる  
…テンポを変えたり、「コードの刻み方」や「ベース (ベースライン) の刻み方 (リズム)」を変化させるなど。

### 【今後の 1 学期期末試験前までの授業予定】

5/21 (木) … 「花」歌唱練習・コードネーム演習 (1)・グループ決め・候補曲&楽器選び (1)

5/25 (月) … コードネーム演習 (2)・曲&楽器最終決定・グループ練習①

《必要な楽器類は各自持参すること》

6/4 (木) … コードネーム演習 (3)・グループ練習②

6/8 (月) … グループ練習③～発表エントリー用紙配付 →提出は 6/19 (金)迄

6/18 (木) … コードネーム演習 (4)・グループ練習④

6/22 (月) … グループ合奏発表会

## B. 3年生2学期（公開研究会）における取り組みより

### 平成21年度 東京学芸大学附属世田谷中学校 公開研究会 音楽科公開授業 学習指導案

日時：平成21年11月14日（土）

第2時限（11：30～12：20）

場所：本校音楽室

授業クラス：3学年B組（男子20名、女子20名、計40名）

研究協議会指導助言：加藤富美子先生（東京学芸大学教授）

授業者：田川聖旨（本校音楽科教諭）

佐々木新平（本校音楽科講師）

#### （1）題材名

管弦楽曲の雰囲気をつえつつ、オリジナルの歌やストーリーを作ろう

#### （2）題材の目標

- ① 管弦楽曲の名曲に触れることを通して、管弦楽をより身近なものとして感じさせる。  
[関心・意欲・態度]
- ② 生徒に管弦楽曲の一部を選ばせる作業を通して、使われている楽器の音色などに関心を  
持たせ、それらの響きの違いを感じ取らせる。 [表現の感受]
- ③ 曲の雰囲気を捉えつつ、グループでの（即興的要素を交えた）再現演奏や歌詞やストーリー  
を創作させることを通して、曲調とそれに適したことばについて考えて表現させ、より豊か  
に楽曲を捉えることができるようにする。
- ④ 他者の曲の捉え方や表現方法から、感じ方や表現の多様性を学ぶと同時に、原曲の作られ  
た背景に興味などを持ち、自分達の表現に活かす。

[表現の工夫・表現の技能・鑑賞の能力]

#### （3）題材設定の考え方

中学校における音楽の時間において、表現領域で実施率が高いのは圧倒的に「歌唱」であり、次に「器楽」である。「創作」においては、全国的に見ても中学校での実施率が極端に低いとされており、昨今の教育課程改訂の度に、音楽の授業時間数が話題に上ってしまう一因となっているとも聴く。

そういうこともあって、本校音楽科では特に平成18年度より、「創作分野」において、作曲をあまり得意とされない指導者でも、比較的容易に「創作的内容」を指導可能なカリキュラムの構築を意識しつつ、カリキュラム開発研究を行ってきた。

今回の題材は、今年度3年生が1学期から2学期にかけて取り組んできた題材のうち、以下の2つの単元を集約する位置づけとして設定されたものである。

- ・ 1学期＝(a)「コードネームを学ぼう」  
(b)「グループアンサンブル」【参考：本報告 5. A.】  
～コードネームの知識を生かして、楽譜にとらわれない自由な発想の  
合奏を作らせる試み

簡単にまとめれば、上記(a)で得た「知識・技能」、(b)で体験した、楽譜にとらわれない「一人一人の自由な発想を活かした形のアンサンブル」、のそれぞれの経験が生かされてこそ、真の意味で達成し得る題材と言えよう。

### 【授業運営上の留意点】

- ① 歌作りについては、コードネームを使って伴奏をつけながら演奏（発表）させた。（伴奏に必要なメロディーとコードネームは、教師が楽譜にして各班に与える。）
- ② 原曲の雰囲気をしっかり捉え、なぜそのようなグループ合奏の再現に至ったかの理由をグループ内で話し合いを行い、しっかりと説明できるようにさせた。
- ③ グループは2～6名であるが、原則一人一役で発表させた。必要に応じて、音楽だけでなく曲に適した振り付けやストーリーを演奏と同時に発表することも可とした。

### 【その他】

#### ① 主体性・社会性・関連性構築のための「コミュニケーション能力育成」の観点から

本校音楽科では、主体性の強い表現者を育成すべく、1年生の入学当初より全ての表現単位における評価活動として、クラス全員の前での発表を行っている。そこでは、「授業内における良い雰囲気づくり」無くして、個性あふれる自由闊達な表現活動は存在し得ないとの立場から、音楽の授業のなかで入学早々「表現者・聴取者としての道徳的マナー」意識の徹底を心がけている。具体的には、表現しようとする生徒全員が、決して周囲のあらぬ言動によって嫌な思いをすることなく、安心して表現することの出来る環境を作ることによって、ひいては「自己肯定感」、「主体性の構築」の形成を目指している。

さらに、そのような理想的な授業環境の構築により、音楽活動を通してクラスの仲間への積極的な意見交換等が可能となり、ひいては「他者理解」を通しての「社会性」の向上と、さらにお互いの内面を理解した上での、（さらに深い関わり合いとしての）「関連性」の構築へと発展していくことが可能だと考える。

なぜこのようなことをここに書くか。それはこれまで私が、中学校で合奏の授業を教えていて度々感じたことに、（生徒自身に周りを見ながら演奏するといった技術的余裕ができない事もあるが、）仲の良い友人とのグループ合奏にもかかわらず、各人が演奏中自分のことにしか興味がなく、周囲との協調性を欠いているような演奏をすることがしばしばあるということである。「音楽＝楽譜どおり行すべきもの」という感覚でいる生徒も多く、そのような生徒に対しても、楽譜は演奏の一部に過ぎず、表現する人によって自在に変わりうる生き物であることを認識させたい。

#### ② 現状の限られた授業時数への対応などといった観点から

昨今の音楽科教員の悩みに、「指導要領に示されたあらゆる領域を、限られた総授業時数の中で体験させつつ、学習の積み上げを達成させる必要があるにもかかわらず、一つひとつの単元に掛けられる時間があまりにも少ない」という問題がある。30年ほど前と比べて、現代の中学生は、学校における音楽の総時数において、必修教科の枠だけで30時間以上減っているにもかかわらず、指導すべき領域は、和楽器の実技指導が必修となるなど、逆に増えている傾向にある。これにより音楽教育の現場では、一領域あたりの指導にかけられる時間が、現実的には減らされてきており、それはややもすると、「中学校音楽科における教育内容の後退」→「学校音楽教育の意義自体を問われかねない要素」を含んでいる。

現に、中学校ではそのようなあおりで、以前に比べ鑑賞領域にかけられる時数も減っているため、鑑賞の授業でオーケストラの楽曲を丸々一曲聴くなどと言う機会はかなり減っていると思われる。（こんなことでは、「オーケストラ文化の未来を支える聴衆も育たないのでは？」と、個人的に危惧している。）

つまり、今後学習単位ごとに各領域・分野（表現（歌唱、器楽、創作）・鑑賞）の学習内容が密接に関わり合った効果的なカリキュラムを構築することによって、限られた授業時間数でも、より効率的効果的な指導を行っていくよう、教師がカリキュラム構築の努力を行うことが、中学校における音楽教育を（後退させず、）さらに前進させるための必須条件だと考える。今回この授業を足がかりに、今後も「創作領域の授業＝生徒にとって難解、かつ、教師にとっても壁の高い」といった命題に突き当たらない、生徒にとっても教員にとっても「取り組みやすい創作単位」を提案していきたいと考えている。

#### (4) 本時の使用教材

##### ①前時までに配付したプリント

(別紙2「管弦楽曲の雰囲気をつえつつ、オリジナルの歌(または歌とストーリー)を作ろう」)

##### ②必要に応じ、コードネームに関する資料

(1学期に使用した「歌集表紙裏頁」「ミュージックノート」など)

##### ③CD『クラシックCDこの一枚〜101曲いいとこどり』(BMGファンハウス)

(1グループごとにこのCD1枚とCDプレイヤー1台を使用)

##### ④「③のCD」よりグループごとに1曲選曲し、教師に作成依頼をした演奏用参考楽譜

##### ⑤グループごとに発表に必要な楽器など(音楽室にあるもの、または持参)

#### (5) 学習指導要領との対応

「2内容」A表現(2)アイウ(3)アイ(4)ア、B鑑賞(1)ア

〔共通事項〕(1)アイ

##### 【特に「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」より】

(i) 今回、発表の取り組みのために教師から各グループに渡された演奏のための楽譜は、あくまでも参考程度といった位置づけであり、生徒達によって多少アレンジを加える必要性を残しつつアレンジを行った。従って生徒によっては、かなり深いところまで創作的表現を試みる生徒も出てくることになる。しかし、音楽科学習指導要領「第3 指導計画の作成内容の取扱い」における、「2 内容の指導についての配慮事項」「(5) 創作指導については、即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、…を重視すること。その際、理論に偏らないようにする…」とあることを捉え、即興的表現を表現活動に取り入れやすくできるよう配慮した。

(ii) 同「(6) 生徒が表現方法や表現形態を選択できるよう、小アンサンブルなどの編成を工夫する」と求められているように、生徒自身に過度な負担を強いる事無く、楽しむ要素をできるだけ大切にするため、今回パート選びは希望制にしてグループ内の話し合いで決定させた。

##### 【その他 指導要領における本授業の位置づけ】

- ・「音楽の要素を知覚し、特質や雰囲気を感じ取る事」「根拠を持って音楽を味わう事」への導入としての位置づけ
- ・感じ取ることから創作へつなげる工夫 ～創作的指導内容としての「コードネームを使ったアレンジ」

#### (6) 授業クラスについて

本校ではちょうど3週間前まで、芸術発表会での校内合唱コンクールへ向けて、毎日どのクラスでも、課外時間などを使つての懸命な取り組みが行われていた。このクラスはその時も意欲的な作品選び(昨年度のNHK 学校音楽コンクール高等学校の部課題曲)を行い、その難曲を、7時間の音楽の授業とインフルエンザによる学年閉鎖期間を除くと、実質約6週間で仕上げた、非常に音楽的能力の高い集団と言える。

他の多くの学校同様、やはり男子が女子に比べると音楽面に積極的趣向を持つ割合が少なくなることは、本校でも同様であるが、しかし特に、このクラスにおいては、クラスまたはグループでの音楽への取り組みにおいて、非協力的で後ろ向きな態度を取るような生徒もおらず、一人ひとりがグループの中で何らかの貢献をできる集団である。

#### (7) 題材の評価規準

##### ●観点1(関心・意欲・態度)

管弦楽曲の世界や器楽創作活動を、積極的に楽しもうとしているか

(=以上、行動観察及び自己評価・相互評価による)

##### ●観点2(表現の感受と工夫)



管弦楽の原曲の雰囲気を感じ取り、音楽的特徴を理解し、表現に生かそうとすることができていたか  
(=行動観察及び自己評価・感想提出用紙による)

●観点3 (表現の技能)

個人個人が原曲の雰囲気を捉えつつ、それぞれに工夫した演奏ができたか  
(=行動観察・表現活動・自己評価による)

●観点4 (鑑賞の記録)

楽曲の全体 (または一部分) を捉え、客観的に言葉で説明する力がついたか  
(=自己評価・感想提出用紙による)

(8) 指導計画 (全5回)

第1次 (20分+50分): 導入及び活動準備

(単元説明・グループ決め・楽曲部分選定・制作及び演奏の分担決め)

第2次 (100分): 教師より、グループごとに前回選定した楽曲部分の「楽譜配付」・制作上の諸注意・グループ練習

第3次 (50分/本時): 発表会直前練習・授業内発表会

第4次 (15分/最終): まとめ (シートによる自己評価・相互評価・感想記入も含む)

(9) 本時の指導

i) 本時の目標

上記2. ④「他者の曲の捉え方や表現方法から、感じ方や表現の多様性を学ぶこと」を主眼として、上記2. ①②④を達成すること。

ii) 本時の展開

	学習活動 及び指導内容 (教師からの指示)	指導上の留意点 (☆) と評価規準 (★: 上記7. ●1～4の記号も使用)
導入 (23分)	グループ発表直前の練習・打ち合わせ ・発表に際してのポイント等、各グループごとに確認へ。(聴衆の立場に立った確認) ・必要に応じて担当教員からのアドバイスを求める ・セッティング時/発表時の留意事項をグループ内で再確認	☆本時の目標「他者の表現から見て学ぶ」部分も必要 ★発表直前に際し、確認事項 ★= ●1, (●2)
展開 (25分)	グループ別発表会 ・1班から9班まで、順に教室の前で発表する。 ・必要に応じて原曲のCDをステレオで流して紹介する。	☆緊張感を持った出入り(できるだけ早めに前もって準備しておく) ☆発表の雰囲気作り ☆舞台トラブルの予測と対応を迅速に行う ★= ●1, ●2, ●3, ●4
まとめ (2分)	教師からの感想/講評 ・この単元の持つ意味について 形式美・管弦楽における表現の奥深さ などの魅力	☆生徒自身の感想・自己評価の記入は、後日改めて行う。 ★= ●1, ●2, ●3

♪管弦楽曲の雰囲気を捉えつつ、  
オリジナルの歌（または歌とストーリー）を作ろう

【基本的な条件】

1. 管弦楽曲の原曲の雰囲気を捉えつつ、歌詞つけたオリジナルの歌をつくる。
2. 任意の楽器（基本的にメロディー+コードネームによる伴奏）と歌とのコラボレーションで、原曲の雰囲気を活かしつつ全員（一人一役）で再現することを目指す。
3. 1グループあたり2～6人とし、演奏時間は20秒～1分程度とする。
4. 学習したコードネームの知識を最大限に活かしつつ、可能な限り工夫する  
(工夫の方法については、班ごとの練習中に、積極的に田川からのアドバイスを受けましょう!)

～メモ欄

【その他の留意点】

- ☆ 実質2時間程（計約100分程度）での構想・練習で、全員が完成出来そうな演奏になるよう工夫する。
- ～ 木琴・鉄琴など、音楽室に数の少ない楽器は、練習時間が確保しにくいので、その点なども考慮すること。
- ～ 音量の特に大きい楽器は、（周囲への迷惑をかけないように）必ず個室で練習してもらいます。従って、クラス内に個室利用希望者が多い場合、練習時間が制限されることになるので、その点も考慮しておくこと。

☆グループの中で演奏の役割分担を行うと良い。

→パート割当については、各自の希望パート仮決定後、

練習開始前に教師からアドバイスを受けることを勧めます。 **推奨**

～5人グループのパート割当例～

[各人の希望楽器]

メロディー（主旋律）パート

← リコーダー ※メロディーパートは省略可

メロディー（対旋律パート）

← リコーダー

コードパート

← キーボード

ボーカルパート

← 歌

パーカッション（打楽器）パート

← 各種打楽器

【今後の発表までの授業予定】

11/2（月）… グループごとに楽曲部分の選定

→ ストーリー・歌詞の制作作業に入る。

（必要に応じて、教師へ採譜・コードネーム付け等の作業を依頼する。）

11/12（木）… 構想を具体化し、練習

11/14（土）… B組発表会（公開研究会）

11/16（月）… A・C・D組発表会

～メモ欄～